

## 「幕末・維新に活躍した軍略家 大村益次郎の功績」

### 1. はじめに

靖国神社の参道の中央に建っている銅像は、幕末・維新に活躍した大村益次郎の像である。

大村益次郎の資料はすくないが、1977年の大河ドラマ「花神」原作・司馬遼太郎で有名になる。

木村紀八郎氏著作「大村益次郎伝」によれば、「大村益次郎という軍略の天才は、幕末の動乱から明治維新に遭遇して、彗星のように現れ、そしてまた彗星のように消え去った。あたかも神が次の新しい時代への橋渡しのため寄越した使者のようである」と表現しています。

### 2. 大村益次郎の出身

1825年(文政8年)5月3日、周防国吉敷郡鑄銭司村字大村で生まれる。祖父の村田良庵は郡代官付の医者である。良庵には男の子がなく、一人娘の梅に隣村の藤村家より養子を迎えた。養子の考益(こうえき)と梅の間に生まれた。

村田家は身分的には医者であるが百姓である。

苗字は村田、名は永敏(ながとし)、通称は宗太郎(幼名)といい、後に祖父の号を襲名し良庵と名乗る。1856年(安政元年)宇和島藩主の命により、通称が蔵六となり、1865年(慶応元年)長州藩主の命により苗字を大村、通称を益次郎と改名した。

### 3. 修学の時代

#### ① 蘭学塾に入塾

1842年(天保13年)18歳の時、周防国宮市(山口県防府市)の蘭医梅田幽斎の蘭学塾に入塾する。

#### ② 咸宜園(かいぎえん)に入塾

1843年(天保14年)4月19歳で、豊後日田(大分県日田市)の広瀬淡窓の咸宜園に入塾する。咸宜園は当時の蘭学はオランダ語の単語の下にいちいち訳語をあて、それを漢文の返り点の要領で読解するという漢訳的手法が取られていて、訳文の理解は漢学の素養が必要であった。そのため蘭学医を志す者は本格的な蘭学学習のため、まず漢学塾で学ぶのが普通であった。

咸宜園の教育は政治的色彩は薄かったが、広瀬淡窓は農兵論を説いている。「武備は国を保つための要務であるにもかかわらず、諸藩は上下ともに困窮し兵備が乏しく戦士も少ない。戦士が少なくしては有事に対処できず、これを克服する為に農兵を用いることが肝要である。農事の妨げとならない時に農民を集めて訓練をしておけば、平時は農業に従事し有事には兵卒となって戦に出ることが出来る」と広瀬淡窓は説いている。

大村益次郎の兵制の基本的考えは農民を中心としたものである。

広瀬淡窓の農兵論が後年の大村益次郎の考えに影響したと考えられる。



1844年(弘化元年)6月、1年3カ月で咸宜園(かいぎえん)を退塾する。

その後、梅田幽齋の梅田塾で医学と蘭学を学ぶ。この時期に村田良庵と改名する

### ③適塾に入塾

1846年(弘化3年)22歳で、大阪の緒方洪庵の適塾に入塾する。

緒方洪庵は大阪で医業のかたわら蘭学塾を開いている。

適塾の教育は原書による蘭学の語学教育であった。中級以上になると適塾所蔵の医書や物理書などオランダ原書を会読し、各人が独習したうえで講義・討議し塾頭等による評価により進級する制度である。村田良庵の適塾での様子は、「酒宴を遠ざけ同僚と深く交わるのを避け、精魂を尽くして学び、時には夜を徹して書を読むことを怠らない」無愛想で無口であった。

この時代、外国船の脅威から塾生の間では、医学書や物理書より砲術書などの兵学書の研究する熱が高まり、村田良庵は医術の修行よりも兵学研究の方に向いていたと考えられる。

## 4. 開業医として独立

1850年(嘉永3年)26歳の時、村田良庵は適塾を退塾し、村田家を再興すべく故郷の鑄銭司村で開業する。

1851年(嘉永4年)同じ村の百姓高樹半兵衛の長女琴子(18歳)と結婚する。

村田良庵は、故郷で開業し所帯を持ち安泰のようだが、医業は繁盛とはいかなかった。

無愛想な性格だけではなく、蘭学を学んで病理には詳しくも知れないが、その治療法は優れているとはいえなかった。

また、琴子はヒステリー体質であり、月に1度ほど荒れることがある、その時良庵は畑に行き長時間おちつくのを待っていた。

1853年(嘉永6年)29歳の時、長年修行を支えてくれた両親の期待を裏切ることとなるが、3年で廃業し故郷を去ることとなる。

## 5. 宇和島藩に出仕

村田良庵は医業を廃業し、兵学志向を緒方洪庵に相談すると洪庵は同意し、宇和島藩医師の二宮敬作の推薦もあり宇和島藩に出仕することとなった。

宇和島藩主 伊達宗城(だてむねなり)は外国の脅威に対して海防のため、洋学の導入や軍制改革に積極的に着手していた。

宇和島藩では村田良庵に西洋式軍艦と砲台を作ることを命令された。

1854年(安政元年)2月に宇和島藩では、村田良庵の蘭学の実力を認められ、月々米6俵支給の処遇となった。月々6俵というと百石取りと同じ実収であり、藩の士官クラスで処遇としては破格である。

同年3月に藩命により村田蔵六と改名する。

また、妻琴子を宇和島に呼び寄せ、自宅で蘭学の塾を開いた。半年後には、妻琴子は郷里に帰りこの夫婦が同居したのは、鑄銭司村での3年と宇和島での半年だけである。

同年8月、藩命により蔵六、嘉蔵(蒸気機関の製造担当)、二宮敬作等と長崎に研修派遣される。

この派遣で造船に関する事項、機関についてオランダ士官から教わった。

同年11月、長崎から返る時、二宮敬作は恩師シーボルトの娘で産科術修行中の楠本イネを伴って帰国し、宇和島で二宮敬作は、イネを村田蔵六に預け蘭学を学ばせることとした。

1855年9月(安政2年)、軍艦雛形が完成。1856年2月(安政3年)樺崎台場に改鑄された大砲5門を

備え試射を行う。

## 6. 私塾鳩居堂を開く

1856年(安政3年)3月、藩主伊達宗城(だてむねなり)の参勤交代に従って江戸に向かうこととなる。同年11月に、麴町に私塾鳩居堂を開く。鳩居堂では蘭学の基礎を習得させようと考えていたが、入門者の大部分が兵学修行者であり、次第に兵学塾としての色彩を濃くなり、この時期に村田蔵六は西洋兵学の知識を自ら深めていったものと考えられる。

1857年(安政4年)1月幕府の蕃書調所の教授手伝を宇和島藩から命じられ、蕃書調所で翻訳をしながら塾を運営していた。

1857年(安政4年)11月蕃書調所での翻訳の技術が高く評価され、講武所に勤務変更となる。講武所は旗本・御家人の子弟に剣術、槍術、砲術などを教育する機関である。講武所での村田蔵六の役目は、砲術における兵学を講義することと必要な洋書の翻訳である。

## 7. 長州藩士となる

1860年(万延元年)4月、村田蔵六36歳の時、桂小五郎(木戸孝允)の強い推薦により、青木周弼(萩藩医)を身元引受人として長州藩士となる。

長州藩麻布屋敷の一角で長州藩の藩士に対し兵書の講義を始めた。講武所での役目は従来通りである。

1861年(文久元年)1月、講武所の各藩士が国許に召還されるのを防ぐため幕臣に取り立てる動きがでてきた。これを恐れて長州藩では幕府に対し蔵六の講武所の辞職を願い出てこれが認められた。その後、藩からの任務は、長州藩の西洋兵学機関である博習堂規則改訂である。その為、蔵六は萩に向かう準備に取りかかった。

1863年5月(文久3年)長州藩が攘夷開始で外国船を壇ノ浦で砲撃した。砲撃後、6月に村田蔵六は国許へ召還命令を受け、9月に私塾を閉じ江戸を発った。村田蔵六は横浜沖の外国艦隊の戦力を熟知しており、また長州藩の壇ノ浦の砲台の貧弱さ砲術の未熟さを感じていたが、藩の攘夷についての発言はしなかった。

1864年(元治元年)2月、村田蔵六40歳、長州藩の兵学校教授役を命じられる。同年7月19日、長州兵は入洛を試みるが(禁門の変)、会津・薩摩と戦いで総退却となる。その後幕府は7月24日に長州征討の命令を出す。また、四国連合艦隊は8月5日、下関への砲撃を開始し陸戦隊が上陸し砲台の破壊し占領した。藩では休戦交渉を申し入れ、急きょ英国留学から帰国した井上聞多(馨)、伊藤俊輔(博文)を通訳として交渉にあたらせ外国船の馬関海峡の自由な通行、石炭、水、食糧の供給など賠償金を除いて、8月16日講和が成立した。対外国抗争は解決したものの幕府は薩摩藩の西郷吉之助(隆盛)を長州に派遣し、禁門の変の首謀者を処分迫った。藩は首謀者の処分を承諾し、3家老と4参謀の処分を受け入れる。これにより征長軍の撤兵を決定した。

村田蔵六は長州藩混乱の時期に、オランダ人クノープの戦術書を翻訳した「兵家須知戦闘術門」を著作し、山口明倫館から刊行される。この「兵家須知戦闘術門」は、今後の長州藩の軍制改革や長州再征における大村益次郎の戦略に影響を与えることとなる。

## 8. 長州藩の軍政改革の実施

1865年(慶応元年)5月、村田蔵六41歳の時、幕府は長州再征を宣言しており、長州藩はその対であった。その時期に正式に藩士となり軍政専務を任命される。

以後、長州藩の軍政改革の責任者として藩政の中枢に名を連ねることとなる。

軍政改革の

第1は、軍組織の再編である。その内容は農商兵の組織化と共に、家臣団の再編である。農商兵は、農民・商人から募集し藩政府から給与を支給し、あらかじめ訓練を行う。家臣団の再編は、従来藩の兵制の大組を解体し再編成した。大組士を中心に兵学校で士官の速成教育を行った。長州藩の兵力は、家臣団1500人 農商兵隊1600人 3支藩兵が再編され動員体制が整えられた。

第2は、装条銃を中心とした装備の近代化である。装条銃は3月末に800挺購入していたが、さらに1000挺調達すべく、長州藩名で購入不可能のため薩摩藩の名義で前装式のミニエー銃4300挺、ゲーベル銃3000挺を購入した。

第3は、村田蔵六が創出した新戦術の用兵の徹底である。その為に蔵六が訳したクノーブルの三兵戦術書「兵家須知戦闘術門」を用いて教育した。

三兵戦術は決戦戦力である歩兵を中心に、騎兵と砲兵を組み合わせた統合戦力である。

歩兵については、槍隊に変わって銃隊が主体となり先頭部隊を広く散会させ銃撃し攻撃する散兵戦術を説いた。しかし散兵戦術は兵が広く散開するので、指揮官の指揮が困難となるため小部隊の指揮官の権限を高め、迅速に戦闘指揮出来る人材教育を短期間で行った。

この年12月、藩命により、大村益次郎と改名する。

大村は地名、益次郎は父親の考益(こうえき)の益を取ったものである。

同時に桂小五郎も藩命により、木戸寛治(かんじ)と改名する。

## 9. 第二次長州征討時の功績

1865年(慶応元年)9月、幕府内には、第一次長州征伐の撤兵直後から、征討の不徹底の声があり、藩主父子の隠居謹慎と領土10万石の削減を要求したが長州藩はこれを拒否し、また藩内の幕府恭順派が打倒されるなど情勢変化があり、第二次長州征討が決定される。

幕府軍の長州への侵略経路は4経路予想される。

第1は、広島から山陽道沿いに岩国に至る芸州口。第2は、小倉から門司を経由して馬関海峡を渡り下関に至る小倉口。

第3は、山陰道沿いに津和野を経て長州藩領に迫る石州口。

第4は、大島(屋代島)を攻撃する大島口、4経路が想定された。(四境戦争)

大村益次郎が軍制改革を一任されたと言っても、成果が評価されるのは、四境戦争で幕府軍との戦いの後のことである。

1866年(慶応2年)6月7日、幕府軍の軍艦が大島を砲撃し幕府歩兵隊が上陸し占領したが、長州藩海軍総督の高杉晋作が下関沖からかけつけ、12日幕府軍艦4隻を夜間に奇襲攻撃し、14日に騎兵を上陸させ17日に幕府軍を撃退し大島を奮還した。



芸州口は、6月14日幕府軍の先鋒隊と衝突し、撃破したが幕府の洋式訓練を受けた歩兵と激突し戦線は膠着状態となった。

小倉口では、6月17日未明に門司に軍艦で攻撃し、大里に上陸し小倉藩兵を破ったが、幕府艦隊が長州軍の背後から砲撃され下関に退いた。

石州口の実際の総司令官は大村益次郎である。

益田に進むには津和野藩領を通らなくては行けないが、津和野藩は長州藩との衝突を避ける態勢を

取った。益次郎は津和野城下を避け迂回して益田の南まで迫った。

6月17日早朝、長州軍は二手に分かれ益田で陣をはっていた浜田藩兵を撃破する。

戦いの後、住民の動向に鋭敏な益次郎は道端に標札をたて、「戦いを起こしたのは貴藩と戦いするものではない。被害があったら申し出て下さい。兵士が乱暴すれば訴えてください厳罰に処します。」

この標札は、この後占領した石州の各地にたてられた。

7月16日、長州軍は山陰道と海岸沿いの両方から追撃すると、幕府兵は浜田城に逃げ込んだ。浜田藩と講和の交渉中に自ら城に火を放ち幕府兵は逃げ散った。

続いて兵を出し幕府領の石見銀山をも占領し当初の作戦計画通り完全に長州藩が占領した。

小倉口では、7月20日将軍家茂(いえもち)の死去に伴い、幕府軍の諸藩統括の家老小笠原長行が小倉城から秘かに去ったのを

機に幕府兵も小倉から撤兵した。小倉藩は孤立無援となり小倉城に火を放た。長州軍は8月2日小倉を占領した。

9月2日、幕府と長州藩は休戦成立により幕府軍の兵は全て引き上げて行った。

幕府軍の多くが旧式の装備・戦法であったのに対し、長州軍は大村益次郎の軍制改革によって短期間で戦力を一新し勝利へと導いた。これにより益次郎の名は一気に知れわたった。



## 10. 明治維新での功績

1868年(慶応4年)大村益次郎44歳。

同年1月3日、鳥羽伏見で朝廷軍と幕府軍が開戦。6日に幕府軍は総崩れし、大阪城の将軍慶喜は江戸に向かう。1月7日朝廷は徳川慶喜の追討令を出す。

2月12日、徳川慶喜謹慎のため上野に入る

2月15日、有栖川宮熾仁(たるひと)親王、東征大総督として京都を発つ。

4月11日、江戸城は平穏のうちに東征軍に引き渡され、徳川慶喜は水戸へ退去する。

閏4月21日、大村益次郎は軍務官判事となり、江戸在勤を命じられる。

江戸の大総督府における大村益次郎は、無愛想なうえ冷徹な合理主義者であり、妥協しない態度は怒りと恨みを買うことになる。たちまち薩摩藩士の海江田信義と衝突する事になる。

この頃から、益次郎は同盟関係にある薩摩藩と敵対する時期が来ると予測し、軍本部を江戸ではなく大阪に設置することを考えており、目黒にあった幕府の火薬庫を伏見に移動させた。

江戸の浮浪の輩が横行し不穏な情勢と、幕士の上野山中に集結し反逆の兆しがあるが、軍費不足のため積極的な作戦が取れないでいたが、旧幕府がアメリカに発注していた軍艦ストンウォール号引き取りのた

め、大隈八太郎(重信)が25万両を調達して横浜に来た。この25万両を軍費に流用した。

5月1日、江戸市中の鎮撫権を勝海舟から取り上げ、大総督府みずからこれに当たることとなった。

5月7日大村益次郎は、江戸府知事兼任となり江戸市中の警備・行政を任されることとなった。

彰義隊討伐についての軍議では、海江田信義の「官軍の数が不足しているので時期早々」という意見に対し、益次郎は「そんなことはない。あなたは戦を知らなすぎる」と真っ向から対決したが、益次郎の意見が通り討伐が決定した。海江田信義と大きな溝が出来た。

彰義隊討伐の軍議では、大村益次郎は「夜襲をさけ、昼間正々堂々と戦う」と主張し反対の意見を押し切った。また、江戸市民に対して高札を立て上野討伐を告げその趣旨を論し、各藩には攻撃当日は外出を禁じる等の処置を取った。

討伐計画は益次郎が秘密裏に立案し行動直前まで諸藩に発表しなかった。

5月15日、上野攻撃が開始された。

午前7時過ぎ、正面攻撃部隊は薩摩、鳥取、熊本三藩の兵で上野黒門口に進み交戦、背後攻撃部隊は長州藩等で団子坂に進み交戦、交戦は昼まで続いたが膠着状態となった。

昼過ぎ、益次郎の指示で佐賀藩のアームストロング砲2門が発砲された。

その砲音は上野一帯を震撼させた。敵兵が動揺し始めた機に正面隊は突撃し黒門を奪い、後方の山王台の敵兵を敗走させた。

背後隊も上野北の天王寺に進み正面部隊と合流、夕刻には彰義隊の掃討は終了した。

この日、大総督府の死傷者120名、彰義隊死者300余名、傷者ほぼ同数であった。

上野の彰義隊の討伐は、失墜しつつあった大総督府の威信を回復し、徳川の天下から新政府に変わったと市民も感じだした。

この殊勲者は大村益次郎であり、その戦略と戦術は一躍名をとどろかせた。

8月28日に米沢藩、9月15日に仙台藩、9月24日に南部藩、9月27日に庄内藩が降伏し、また9月22日に会津藩が降伏して奥羽越後の平定が成った。

その後、江戸を脱走していた榎本艦隊は、旧幕府兵等3000余人を収容し函館と五稜郭を占領した。

1868年(明治元年)10月24日、大村益次郎は軍務官副知事に任命され、明治の軍政改革は益次郎中心に進められることとなる。

新政府軍の函館・五稜郭の攻撃は、益次郎の「春になり暖かくなるまで待とう」との意見に従い、まず兵を青森に集結させた。

1869年(明治2年)4月29日、函館を総攻撃、5月18日に榎本軍は降伏し、全国平定がなった。

木戸孝允は戊辰戦争で戦死した者の招魂場を設けるよう、大村益次郎に委託した。益次郎は元幕府の歩兵訓練場の九段の地に10万坪を確保し東京招魂社を建設し、政府軍戦者3588柱を合祀した。

## 11. 明治の建軍

明治政府が樹立したものの、兵権は依然として各藩主にあり、天皇直属軍隊はすなわち親兵は僅かであった。そこで大村益次郎の任務は、まず有力な親兵を設置することともに各藩主の兵権を奉還させ全国の軍備の充実を図ることである。

それは、藩を解体し国を天皇直轄にする事と、武士の階級すなわち士族の特権の否定が必然的に伴うのである。

大村益次郎の考案は、第一段階として3年間の暫定処置を設けて建軍を図る。それまでは現在ある藩兵の利用です。第二段階として建軍の中核を大阪に置き兵学校や造兵局等を設け、兵隊は農民を中心とす

る国民皆兵の徴兵令をしき、全国要地に鎮台を設けることである。

大村益次郎の第二段階考想の徴兵令について、大久保利通の三藩親兵による建軍論と木戸孝允と益次郎による国民皆兵論の論争がおき、建軍について具体化されることはなかった。

大村益次郎の権限で第二段階のうち大阪中心の建軍構想を既成事実化する考えであった。

## 12. 刺客に倒れる

1869年(明治2年)7月8日に官制大改革が行われ、大村益次郎は兵部省大輔に任じられる。

大村益次郎は兵制会議の結論を待たずに軍制改革を進めるべく、大阪を拠点とする「海陸軍建設要綱」を具体化して上申するため京阪方面の実地検分に出かけた。

京阪地区の軍拠点予定地等の検分を行い、京都の定宿に入ったのは9月3日である。

翌9月4日、長州藩大隊司令の静間彦太郎と伏見兵学寮教師の安達幸之助の3人で旅館二階の四畳半で酒を飲みながら雑談していた。暮れ六つ(午後6時)頃、突然刺客が乱入してきた。

益次郎は斬りつけられた衝撃で後ろに倒れたはずみに灯火が消え暗闇となった。

静間彦太郎と安達幸之助は、窓から河原に飛び降りたところを下で待っていた刺客に斬りつけられた。

暗闇の中、益次郎は1階浴室の浴槽に身を潜めた。賊は安達を益次郎と間違え本懐を遂げたいと思ひ引き上げて行った。賊は8名で、元長州藩関係者が3名いたのは皮肉なことである。

静間、安達は即死、益次郎の刀傷は6か所であった。

治療の結果、傷は順調に回復しているかに思えたが、右膝関節の傷が化膿し高熱と体力衰弱が続いた。

10月1日、蘭医ボードインがいる大阪府仮病院に転院したが敗血症が現れはじめていた。

10月27日、右大腿部を中ほどから切断する手術が行われる。

11月5日、大村益次郎、治療のいかなく45歳で逝去した。

大村益次郎が没して、益次郎の考想に反する者との論争が続いたが、欧州の軍事視察から帰国した山県有朋が後任に収まった。山県は長州藩士であったが、薩摩との妥協を図りながら彼独自の建軍構想を進めて行った。

大村益次郎の建軍構想のうち「大阪を中心とした建軍」以外の、諸藩の廃止、佩刀の禁止、徴兵令の定め、兵学校の開設等々、生前に企画していた通りに進んだ。

## 13. 最後に

大村益次郎の功績は、幕府の打倒および旧幕府の勢力の平定である。

具体的な第一は、幕府の第二次長州討伐に対し、短間に近代的な長州軍を作りあげ、幕府軍を撃破して幕府打倒の口火を切ったことである。

第二は、関東・奥羽・蝦夷地の旧幕府勢力の平定を指導し、維新戦争を早期に終結させたことである。

大村益次郎は、医師を目指していたが挫折し兵学の学者としての道に方向転換した。

木戸孝允の協力があったが、益次郎の出現がなかったら明治維新は叶わなかったのではないか。

以上

主な参考資料	大村益次郎伝	木村紀八郎	島影社
	花神(上・中・下)	司馬遼太郎	新潮社
	大村益次郎・幕末維新の兵制改革	糸屋寿雄	中央公論新社